津島市ゆかりの書家 故 松下 芝堂 氏に迫る

松下　芝堂（まつした　しどう）

1926年愛知県豊橋市生まれ。
本名は須砂雄（すさお）。21歳で鈴木翠軒（すいけん）に師事。
日本最大の公募美術展である日展の審査員を10回務め、津島市を拠点に書道文化および翠軒流の発展に努めた。

書との出会い

芝堂が書と初めて出会ったのは、小学校での国語の授業だった。国語の先生が、熱心に習字を教えてくれたことで、書が大好きになった。

当時の国定教科書の筆者であったのが、鈴木翠軒だった。この頃は、翠軒に直接書を習ったわけではないが、翠軒の字を手本に、書にのめりこんでいった。

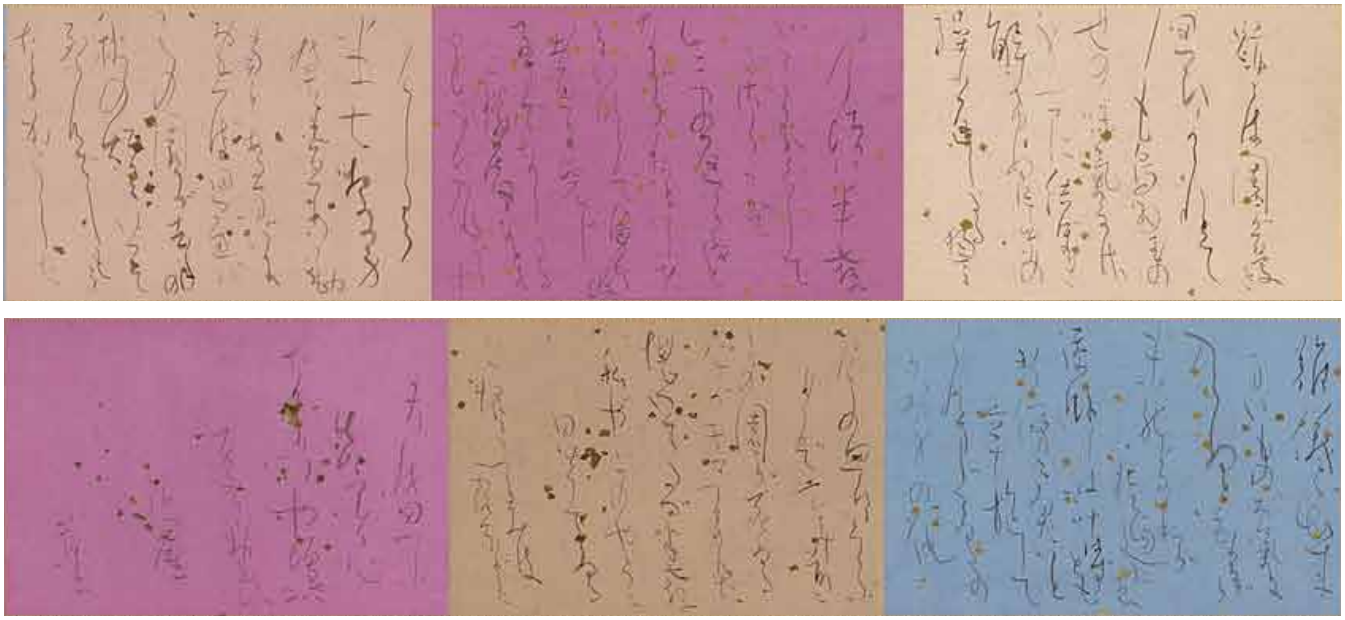
昭和21年、芝堂は、疎開で偶然渥美半島に訪れていた翠軒を訪ね、迷いなく弟子入りしたのだった。

翠軒と芝堂

淡墨(薄墨)を用いた行草書で、円を中心とした流暢な作風が特徴の「翠軒流」。

芝堂の師である鈴木翠軒が打ち立てた流派で、芝堂は21歳で弟子入りしてから82歳で亡くなるまで、その発展に尽力した。

翠軒の作品「万葉千首」の料紙(色のついた紙)は芝堂が作成したものであり、この料紙が作品の完成に大いに貢献している。



鈴木翠軒　「艶容女舞衣　酒屋の段」

松下芝堂　「清冽な　川の水を　手ですくって　飲んだ昔が　なつかしい」

物事の元は、ひとつ。

芝堂は晩年、「不二（ふじ）」という言葉を好んだ。物事は二つとしてなく、必ず根源は一つなのだと言った。

「不二妙道」
「妙道（真実の道）は二つとして無い」の意

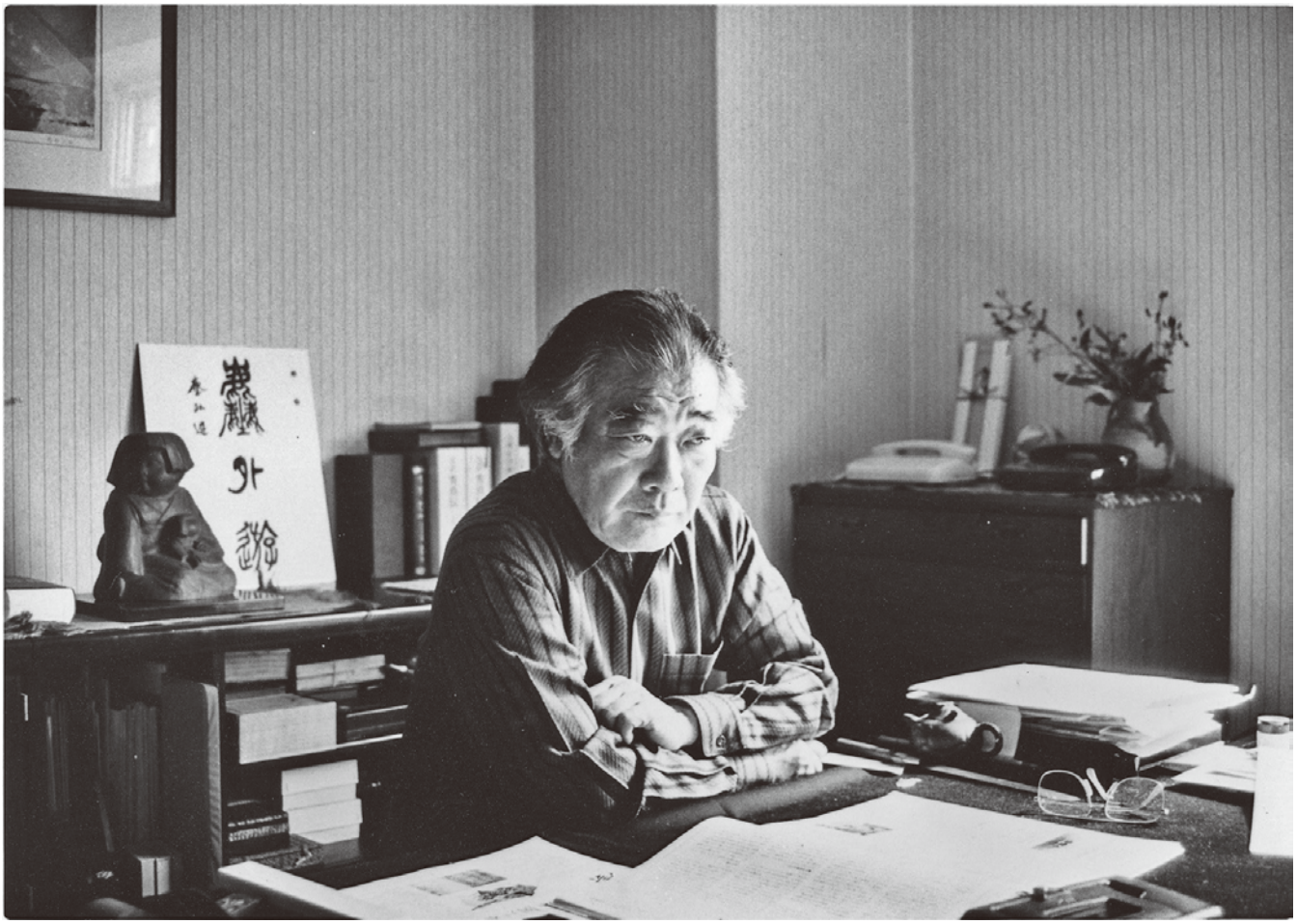
書の魅力

書は芝堂にとって切り離せないもので、全てだった。体内にあるものを吐き出すように書と向き合った。

一方で、芝堂は書を「遊び」として捉えており、書を書くことがとても楽しかったという。

そんな芝堂が目指した理想の書は、きばらずに心をこめた「やさしい書」。

今回展示予定の作品は、市主催の郷土の芸術家展では初公開。ぜひ柔らかく包まれるような優しさを感じてほしい。



（以下、英風さん…英、広報…広）

広：芝堂さんは、一つの作品につき、どのくらいの時間をかけて制作されていたのでしょうか。

英：昔は、日展などの展覧会が少なかったので、それに向けて一年かけて制作していましたね。ほかの仕事もありましたから、合間に集中して制作していました。気づけば部屋の中は紙が山積みになっていました。

広：芝堂さんが作品を通して伝えたかったのはどういったことだったのでしょうか。

英：書で何かを伝えようとは考えていなかったと思います。自分の姿を見せれば、言葉はなくとも伝えたいことは伝わる、といった考えの人でしたから、作品に対しても同じだと思います。

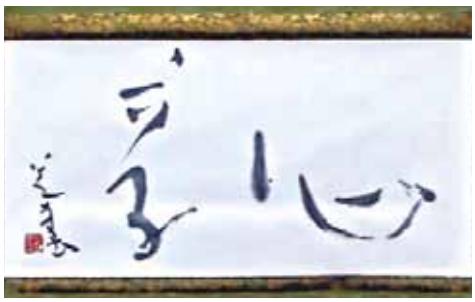
芝堂さんのご長男であり、弟子でもある松下英風さんに津島市広報担当者がお話を伺いました。

4

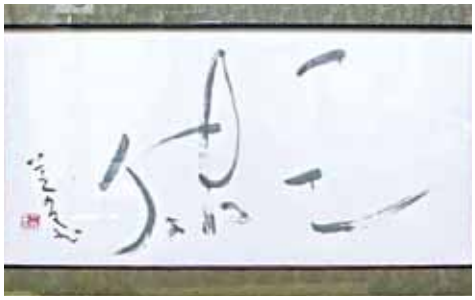
4　平成10年、日展作品「花下酔（かかのよい）」にて恩賜賞と日本芸術院賞を同時受賞。これは当時の書道界で数少ない栄誉であり、中部地方では初の偉業であった。

1

2



3



1　芝堂の作品制作風景
2　「心音」
3　「三昧」
※2・3は郷土の芸術家展にて展示予定

広：英風さんからみた芝堂さんは、どのような人物でしたか。

英：一言でいえば、怖い人でした。物事に集中していることが多かったですからね。いつもピリピリしている怖さがありました。

広：芝堂さんから言われた印象深い言葉はありますか。

英：自分は、書道を始めたのが周りよりも少し遅かったのです。そのことを父と話したときに、「何かを始めるのに年齢は関係ない。やりたくなったときがスタートだ。」と言われたことがありました。それが最初で最後でしたが、普段はなにも言わない人なので驚きましたね。

編集・文責　シティプロモーション課広報・プロモーションG　☎55-9584

津島市文化祭「郷土の芸術家展」

本特集で紹介した松下芝堂氏の作品や、洋画家の真野広氏の作品を展示します。

日時　11月1日(日)～3日(火・祝)
午前10時～午後5時
（最終日は午後3時まで）

会場　文化会館小ホール

問合　社会教育課生涯学習G
☎55-9421